

京都大学大学院

生命科学研究院

概要



**Graduate School of Biostudies,
Kyoto University**

2007-2008

表紙写真

医学・生命科学研究棟（G棟）

目 次

生命科学研究の知によって豊かな未来を開く －21世紀の人類の福祉と幸福を目指して－	2
京都大学大学院生命科学研究科の組織	4
専攻・講座・分野の紹介	6
統合生命科学専攻	7
講座・分野の紹介	8
高次生命科学専攻	16
講座・分野の紹介	17
講義科目の説明	24
教育課程及び履修方法	29
学生募集	30
案内地図	32



生命科学研究の知によって豊かな未来を開く —21世紀の人類の福祉と幸福を目指して—

研究科長 西 田 栄 介

生命科学研究科の設立と歩み

21世紀に入り生命現象を遺伝子・分子・細胞のレベルに加え個体のレベルにおいても実証する生命科学が新しい段階へと進みつつあります。京都大学ではこのような流れを見越して1999年に理学、農学、薬学、医学の研究グループを結集して内外の大きな期待の中で我が国において初めての生命科学研究科が発足しました。これは、従来の生命科学関連の研究領域では達成できなかった教育・研究体制を整えた画期的なものです。この中で、『生命（いのち）』の科学を総合的に、またより高い次元で理解することを目指しています。2001年3月には生命科学研究科同窓会『いぶき』も発足しています。

生命科学研究科はスタート以来8年が経過しました。この間大山莞爾、柳田充弘、稲葉力ヨの3人の研究科長の先導の元に、予想に違わず研究活動は非常に活発で高い研究成果も得られており、2001年度には文部科学省のCOE (Center of Excellence) 形成の拠点ともなっています。さらに2002年度には21世紀COEプログラムに採択され、これを基盤に院生の研究助成と共に先端的研究に直結した英語教育の充実をはかっています。このように研究教育活動の広がりと深さが実感されます。大学院学生と教職員は密に接觸し、多様性とフロンティア精神を重んじる若々しい気風に加え、互いに切磋琢磨する心強い雰囲気も生まれています。京都大学キャンパス内に散在した分野研究室をまとめていくことが現在の生命科学研究科にとって最大の課題ですが、南部キャンパスには医学部と協力する総合研究棟が、北部キャンパスには農学部との共同新営棟が2005年に建設されました。このように、生命科学研究科の前途は洋々としたものです。

現在の研究成果とその発展が重要であることは言うまでもありませんが、研究科としての成果はさらに長い年月の後に問われることになります。そのためにも、教育研究活動における未来に対する明確な目的意識をもつことが必要です。生命科学研究科発足時に掲げた『21世紀の人類の福祉と幸福を目指して』という目標の達成に向けて、これからも弛まない努力を続けたいと考えています。

21世紀の生命科学

1990年代における分子生物学の爆発的発展により遺伝子、分子、細胞を共通の言語として新しい切り口から生命科学の研究は展開されてきました。したがって今後は高次生命体を含めて統合的な解析を基盤としたより高次な生命現象解明へ取り組むことが21世紀生命科学研究の必然の流れです。また得られる情報や知識を人類の知恵としてより豊かで安全な人間社会を築くための時代の要請でもあります。そのために生命科学研究科は統合と高

次という2専攻から構成されています。

新しい生命科学技術の成果が日常生活に浸透しつつある現在、技術開発だけではなく自然や環境との調和を考えた深い洞察力をもつことも大切です。そのためには、自らの専門分野に留まることなく、生命科学の多面的な進歩を理解し、人間社会を取り巻く環境の重要性を認識すると同時に、社会との関係を見極め且つ広い視野に立つて考察する資質を持つ生命科学分野の研究者の育成も重要な要素だと考えています。

生命科学研究科の使命

- (1) 世界最高レベルの新しい生命科学を推進できる人材を養成。
新しい生命科学の知識と技術をマスターさせ、社会的自我をもった人材の養成をはかり、企業・大学・研究所からの要望に応えます。
- (2) 新しい生命科学を駆使し、地球環境保全と人類の福祉と幸福を目指す人材の養成。
従来の理学、農学、医学、薬学分野の知識と技術を統合し、複雑な生物圏を理解し、21世紀の人間社会に貢献できる人材を養成します。
- (3) 生物が示す多彩な生命現象を高次機能として捉え、その高次機能を追求する人材の養成。
21世紀の福祉と幸福を目指す社会において、人類と他の生命体との調和のとれた人間社会を宮むための指導的立場に立つ人材の養成に応えます。

これらの使命を達成するために2つの専攻は有機的に結びつき、独自の視点を持ちつつ独創的な研究と教育活動を行う所存です。

生命科学研究科の方針

- (1) 次世代への高度な生命科学を身につけた人材の養成。
次世代の人類が直面する様々な未知の課題に対応する独創的、創造的な能力を身につけた新しいタイプの人材を養成します。
- (2) 人材養成を通じた社会的自我の確立。
研究科構成員の独自な学問的背景と未来への展望に基づき、従来とは異なる多角的な教育効果の評価体制を構築し、健全で公平な批判精神を養うことを目指します。
- (3) 教員人事の活性化と弾力化。
各研究分野の活発な交流に基づき、新たな生命科学を展開するための独自の研究を推進・開拓します。
- (4) ポストドク制度の活用とその業績評価。
国際的な生命科学者を集中的に養成するために現存の制度を最大限活用し、学生に対する指導者の数を従来の研究科以上に確保します。

本研究科の講座構成

明日の人類の福祉と幸福に貢献する

統合生命科学専攻

- 遺伝機構学
- 多細胞体構築学
- 細胞機能動態学
- 細胞全能性発現学
- 形態形成学
- 応用生物機構学
- 環境応答制御学
- 生態系のしくみ

高次生命科学専攻

- 生命文化学
- コミュニケーション生命倫理
- 脳と体のしくみ
体の反応のしくみ
体のつくられ方
- 認知情報学
- 体制統御学
- 高次応答制御学
- 高次生体統御学
- 高次生体機能学

生き物 ヒト

遺伝子・細胞

京都大学大学院生命科学研究科の組織

統合生命科学専攻

講座名	分野名	研究内容
遺伝機構学	遺伝子伝達学	遺伝情報伝達制御機構の解明
	遺伝子動態学	RNA/RNPによる細胞機能の統御および制御
	細胞周期学	細胞周期、がん化、老化における染色体機能の研究
	分子継承学	染色体の複製と娘細胞への分配の機構と制御に関する研究
多細胞体構築学	細胞認識学	神経系などの細胞集団の構築と再編成を支える分子機構
	シグナル伝達学	細胞増殖・細胞分化、発生及び高次機能のシグナル伝達
細胞全能性発現学	遺伝子特性学	植物細胞の全能性の基本原理を遺伝子で研究
	全能性統御機構学	植物細胞の全能性の原理を遺伝子・細胞レベルで解明
応用生物機構学	生体情報応答学	生物の環境応答の基本原理とその応用
	微生物細胞機構学	微生物の細胞生理の基本原理とその応用
	分子応答機構学	微生物および動物細胞の分子応答の基本原理とその応用
環境応答制御学	分子代謝制御学	植物の環境応答現象の解析とその分子機構
	分子情報解析学	細胞膜・細胞核のナノバイオロジー
形態形成学* (協力講座)	ゲノム維持機構学 ¹⁾	細胞周期チェックポイントの分子機構の解明
細胞機能動態学* (協力講座)	細胞情報動態学 ²⁾	抗ウイルス自然免疫機構の解明
	信号伝達動態学 ²⁾	個体の発生、細胞の増殖・分化、老化についての分子機構

*協力講座：1) 放射線生物研究センター、2) ウィルス研究所

教員名簿

講座名	分野名	教授	准教授	講師	助教
遺伝機構学	遺伝子伝達学		中世古幸信		加納 純子
	遺伝子動態学	井上 丹	白石 英秋		齊藤 博英
	細胞周期学	石川 冬木			鍋谷 彰
	分子継承学	(特任)柳田 充弘			
多細胞体構築学	細胞認識学	上村 匡	千坂 修		碓井 理夫
	シグナル伝達学	西田 栄介			宮田 愛彦
細胞全能性発現学	遺伝子特性学	河内 孝之	福澤 秀哉		大和 勝幸
					(特任)石崎 公庸
応用生物機構学	全能性統御機構学	佐藤 文彦		遠藤 剛	伊福健太郎
	生体情報応答学	永尾 雅哉			門間 敬子
					(休)神戸 大朋
環境応答制御学	微生物細胞機構学	山本 憲二	鈴木 秀之		
	分子応答機構学	(兼) ¹⁾ 山本 憲二	増田 誠司		芦田 久
	分子代謝制御学	荒木 崇	畠 信吾		(特任)大門 靖史
形態形成学* (協力講座)	分子情報解析学	竹安 邦夫	吉村 成弘		(特任)大庭 良介
	ゲノム維持機構学 ¹⁾	松本 智裕			土生 敏行
細胞機能動態学* (協力講座)	細胞情報動態学 ²⁾	藤田 尚志	米山 光俊		
	信号伝達動態学 ²⁾	眞貝 洋一	立花 誠		

*協力講座：1) 放射線生物研究センター、2) ウィルス研究所

(兼)：1) 科内 教授 兼任

高次生命科学専攻

講座名	分野名	研究内容
認知情報学	高次脳機能学	生命体の認知と情報制御の基本原理
	生体制御学	生体内情報伝達機構のイメージングによる時空間的解析
	生体防御学	免疫系の認知と情報制御の基本原理
体制統御学	高次遺伝情報学	細胞及び高次生命体の発生・分化・死の基本原理
	生体応答学	細胞及び高次生命体の非自己認識機構
(連携講座)	分子病態学**	生殖系列と脳神経系の形成、組織構築と癌化の基本的機構
高次応答制御学	生体システム学	生命体の高次統合システムにおける細胞内情報伝達機構
	システム機能学	生命体の高次統合システムにおける細胞内情報伝達の原理
高次生体統御学	高次生体統御学	モデル動物を用いた神経変性疾患、発癌、肥満等の基本原理
生命文化学	生命文化学	科学コミュニケーション、生命倫理および現代科学史
高次生体機能学*	高次細胞制御学 ^{③)}	微生物やがんに対する生体防御機構の基本原理
	生体動態制御学 ^{③)}	細胞および高次生命体のウイルス発がん機構の基本原理
	高次情報制御学 ^{④)}	モデル動物などを用いた高次生命体の情報処理機構の原理

*協力講座：3) ウィルス研究所、4) 医学研究科ゲノム医学センター

**連携講座：大阪バイオサイエンス研究所、(独) 理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター

教員名簿

講座名	分野名	教授	准教授	講師	助教
認知情報学	高次脳機能学	渡邊 大	森吉 弘毅		
	生体制御学	松田 道行		中村 岳史	清川 悅子
	生体防御学	湊 長博	服部 雅一		
体制統御学	高次遺伝情報学	米原 伸	酒巻 和弘		李 慶權
	生体応答学	稻葉 力ヨ		高原 和彦	伊豫田智典
(連携講座)	分子病態学**	佐邊 壽孝			
		松崎 文雄	斎藤 通紀		
高次応答制御学	生体システム学	根岸 学	加藤 裕教		生沼 泉
	システム機能学	小堤 保則	竹松 弘		内藤 裕子 (特任)金沢 崇之
高次生体統御学	高次生体統御学	垣塚 彰		堀 清次	大泉 宏
生命文化学	生命文化学	(兼) ^{①)} 稻葉 力ヨ (兼) ^{②)} 加藤 和人			(特任)白井 哲哉
(協力講座)	高次細胞制御学 ^{③)}	杉田 昌彦			松永 勇
	生体動態制御学 ^{③)}		土方 誠		(休)渡士 幸一
	高次情報制御学 ^{④)}	(併)清水 章			

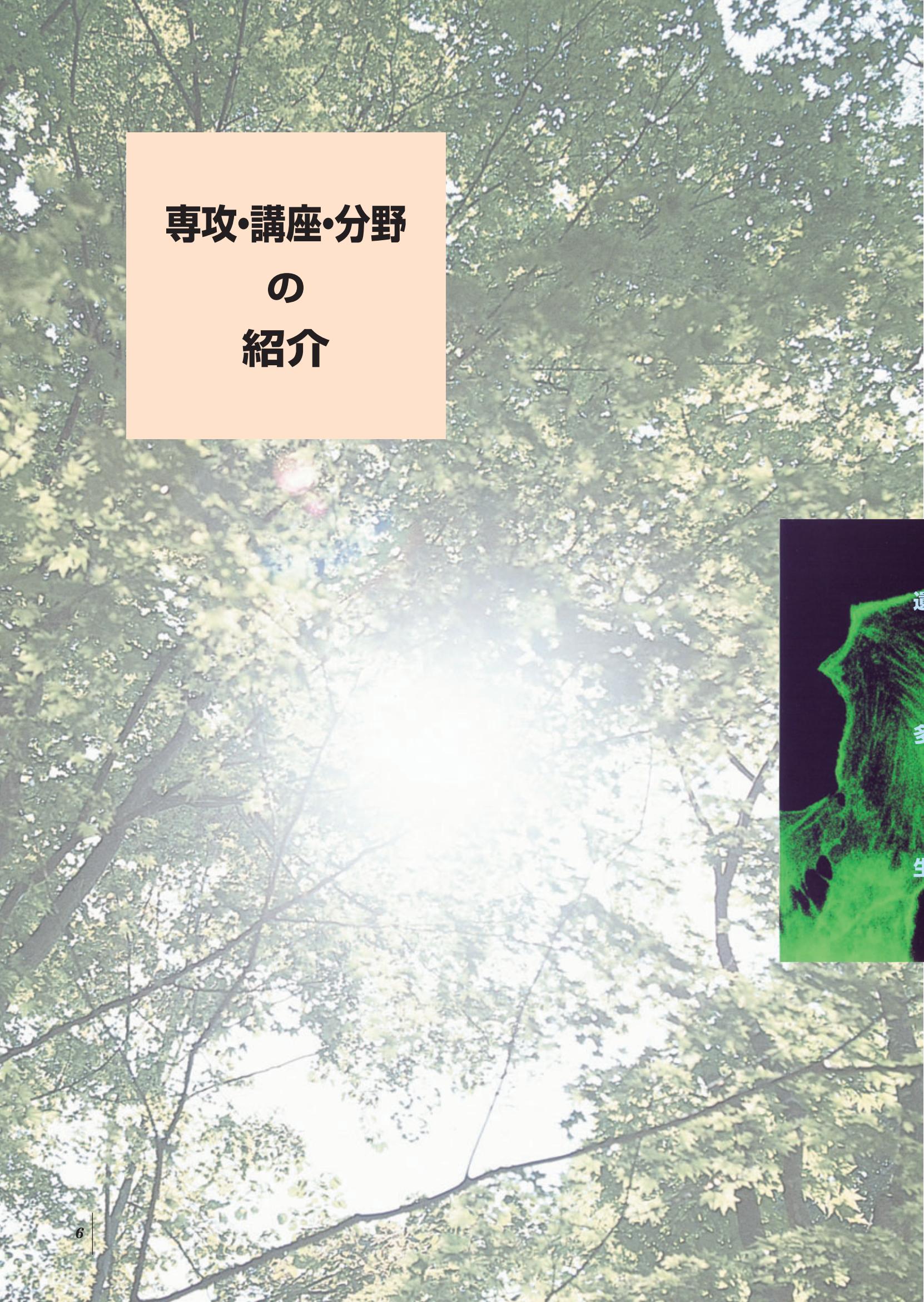
*協力講座：3) ウィルス研究所、4) 医学研究科ゲノム医学センター

**連携講座：大阪バイオサイエンス研究所、(独) 理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター

(兼)：1) 科内 教授 兼任、2) 大学院授業担当

事務部

事務長：福本 穂	総務掛長：泉森嘉宏	総務掛：(主任) 大平直子
	学務掛長：今西恭子	学務掛：(主任) 逢坂 薫 情報担当：(技術職員) 澤田浩文
	経理掛長：廣瀬幸一	経理掛：(主任) 竹口仁美 (主任) 有井秀幸
	研究推進掛長：廣瀬幸一 (兼)	研究推進掛：(掛員) 今井政敏 (掛員) 神田隆志 (技術職員) 渡邊祐三



専攻・講座・分野 の 紹介

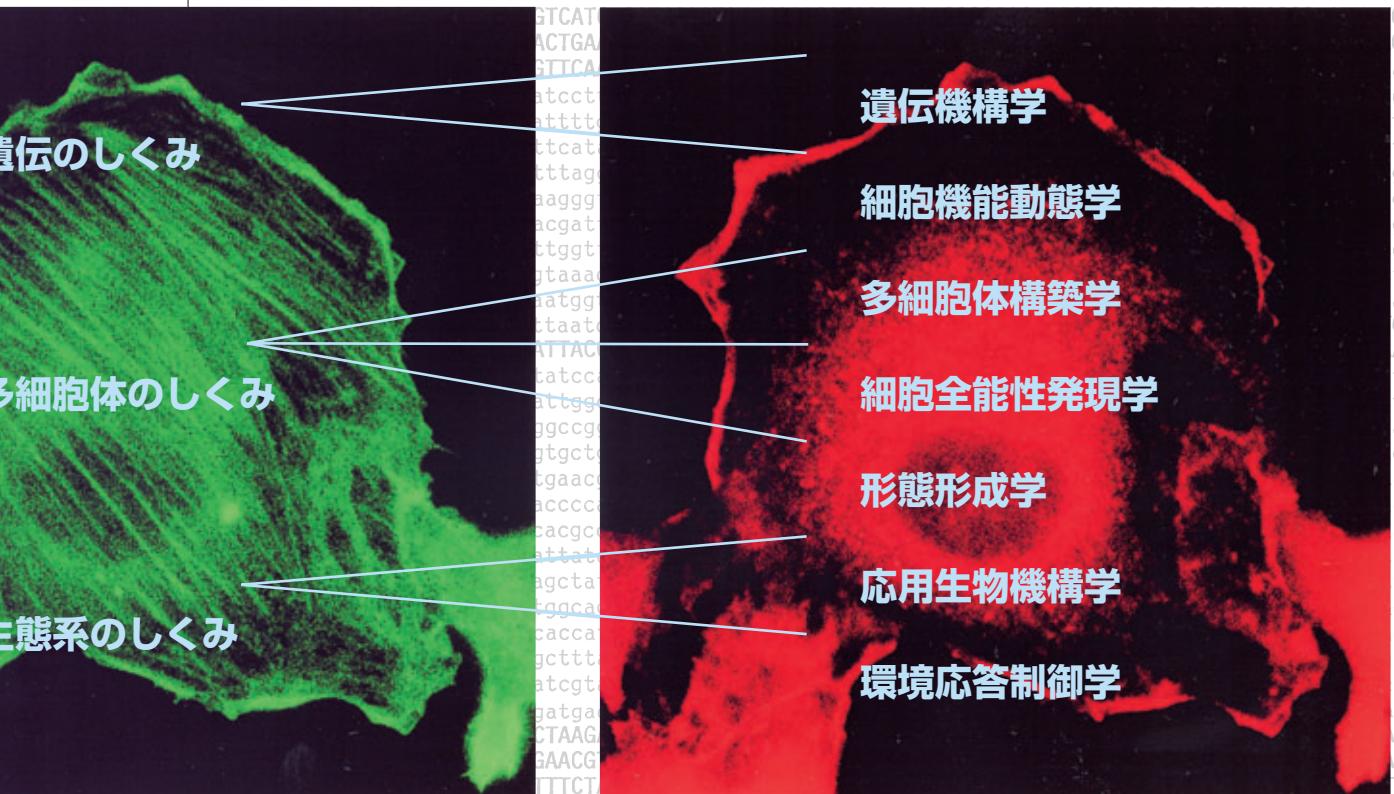
本専攻では、全ての生物に存在する普遍的な要素である遺伝子の継承性と細胞機能の特異性決定の基本機構、多細胞体構築の制御、一個の細胞からの完全なる個体を発生する細胞全般性、さらに発生した個体が多様な環境に適応する過

程で獲得した複合生物系構築ならびに生物の環境応答制御の分子機構の解明に関する教育と研究を行う。

```

90001 cacccttgc tcctatcaa ccactttcc attttaaaa gttattttat gtgattttcc atattattag ggaatttcgtc
90201 ccctttttat atatccaa ctttttttcc aactttatgtt ctatcttaaa agaaatttt caagcatatg
90401 AGTTGGTAA TGTCTCTCT TGGAGTTATA CCATTACTA ATATCACTCA GTATTCTCAA TCCGGGGTTA TTGCTTCGC
90501 GTTAATCCCC CCCCCCCCATC AGTAATAGAT TGCGCAGTGT GAAGTGCTT ATTAAATCATC CATGCACCCA TTGGAGCCTT
90601 AAACGTATT ACTAACACCA AAGTATGGCG AACCGAGTAC GCCGTAAGT GTGTTTATGA ACAATTAAAG GATATTCTGA
90701 CTCCAACGCG TTGACGTCT TCAGGAGTCC TTTCATTCG TTACGCTCGT CCACCAACT ACCAATGAAA TTTCTAAAG
90801 GAACGTGAGT CTATGTTTG ATGAGTTCGA TTGTTTCTAT AGAAATATCC TCCGTTTCA ACTATTGCCT TIAACCATT
90901 TATCTTATT CCAACTCAC GCACAAAGTA GTTTAAGATT CATtaatcg tgatattttt ggcagggttc aactttttt
91001 agtaataatg ccattatgtt tttccatttc aagttaggacg aagtcgttag gaatgtgtt gatgtcttg acgtttttt
91101 ttattaattt gtctgtgatg aactaactta ctataatgtt gatcttgtt accggacggg cgctgtccg caggggactt
91201 aacgaaaaaa cagtccgaca aaactttgtt aaattgcctt ggacaaccgc catcctgtt aacaaatttg attcgaaaa
91301 taaacgaaac ttggtttgg tgaaaactgtt aatgtttgg taacccata agaaataaaa tatctaagt cggttcata
91401 tcgcgtatc ctttacgaa tattttccggg gccattttt gttacatctt ccgccttgc ccaacgcacg aaatgtgtt
< orf196 aaaagatttcc actccgtttt gtttttttttcc aattttttttt ACAAGAATGAA ATGAAGTAAAT TTATCTTGT
91601 TCTGACATTG CTGAACACAA ATCTGAAACA GTTTTGTATT TTGTTTATAA CATTTCGAT AAAATGCGAT
91701 AAACACCCAA ATTCCCTCATG GCAAAATCGA TTACCTTCTT ATTGGACCT TGACTGTAAA TCCATTTCG CAAAGTAAGT
91801 CATTGGAATA TCATTCTCG TAATGCGATC TTCTATTGGA ATTCCAATCA CTTCATTCTG AACCCGACGC ACCAGATTCA

```



```

95001 TTAAATATT GGGGTTTGT ATCTATTCG GATACTTCA CTGGAGTGT ATGGAATTAT TACGGCAGGC TGGGCAAGT/
95101 GGAGCATTAC GATCTGCCGC TCAAATGGTT TCCTACGAAG TTTCCATAGG ATTGCTTCTG ATATCCGTC TACTATCGC/
95201 AGATTGTCTT ACAGCACAACA CGGATATGGT TTGTTTTCCTT CTTGTTCTTA TGTTTTTAT TTCTTGTTT/
95301 TTTTGATCTA CCAGAGGCCG AGGCAGAACT CGTAGCGGCC TACAATGTAG AATATTCTGTC CATGGGGTTT GCTCTTTT/
95401 ATGATCTTAA TGAGTAGTCT ATGTACATTG CTTTTCTAG GAGGTTGGCT GCCCCATCTG GATATTCTA TTTCCAGG/
95501 TTAGTATAAA GGTTCTTTTCTTCTGTTTG TATATATAG GGTCCGCGCA GCATTTCCAC GATATCGTTA TGATCAATT/
95601 CTTCTTGCTT TTATCATTAG CATGGGTAGT CTTTGTCTT GGTGTTCTAG TAGCCTTGA ATGGCTTCCT TAAttcat
95701 aaatatataat atttagggcc gaaggcgc aacgcgc aacgcgc aaaaaatcta tagattttt tccttcagc
95801 agccgcacac ccgcaggggc cactttttt tagtaggatc ctcagagatt taatgtgagg ctgcgcact ttctgtata
95901 gtgaaacaaa aatcttagtga tagaaagtga tgcatatgtt cgcgatattt aaataaaacg aacttcggcc aacgcgc
96001 gggggaggcc tgccgcgaca ggcgcggc ctttctcgccc ctttcaaga aaaagcgc aacgcgc aacgcgc
96101 ctacttcctt cgcgttcgc aagcgcgtaa aggaccta atctgtgtgg gggggccggat aacgcgc aacgcgc
96201 cctcggttggc cctagtcgc ggcgtatgtc ctaagattt cgttagaact ttctctcgat attactcaa tttagcctt
96301 ggtactactc ttcttcatca tggttattt ggcacaatag cctcgttgg ttctctt tctgttattt acgcgc
96401 agatgaaggaa attctcggtt ttcttcttattt attatgtt gatggtaaaa ggctactgtt gagtttcca tacgcgc
96501 ttgggtttt gattgtgtt ttctatgcgc ttctactac gtcgcgc gacgcgggctt ctccctgaaac

```

統合生命科学専攻

基幹講座

○遺伝機構学講座

Department of Gene Mechanisms

真核細胞の生存にとって必須な細胞周期制御のメカニズム、遺伝子の複製分配、維持、修復及び遺伝子転写産物であるRNAの動的機能の分子メカニズムの解明について理解を深める。そのために、複製分配機構を直接研究する遺伝子伝達学、細胞周期の必須因子を研究する細胞周期学、クロマチンや分子集合体レベルでの解析を取り入れた染色体動態学、さらにはこれらの発生過程における組織特異的な変化を追求する。

○遺伝子伝達学分野

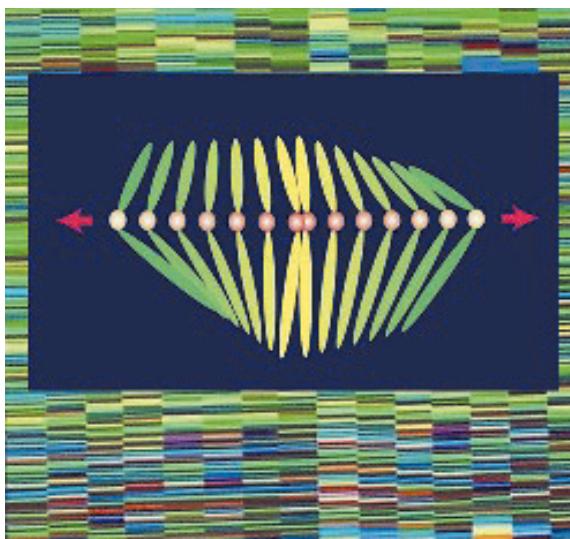
Laboratory of Chromosome Transmission

研究内容

遺伝情報伝達の担い手である染色体の機能制御に関する遺伝子について、細胞周期制御因子に焦点を絞った解析を行なう。

主な研究項目

- ・微小管と微小管結合タンパク質による細胞周期を通じた染色体機能制御機構の解析
- ・分裂酵母突然変異株ライブラリーを用いた分裂期制御因子の網羅的解析



○遺伝子動態学分野

Laboratory of Gene Biodynamics

研究内容

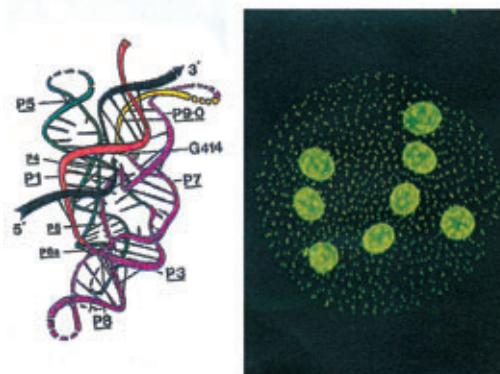
RNA/RNPによる細胞機能の統御および制御についてシンセティックバイオロジーの手法を用いて研究する。高等植物、およびVolvoxを用いて、生殖細胞・生殖器官の形成の分子機構と多細胞体制の構築の遺伝的背景を解析する。

主な研究項目

- ・天然のRNA/RNPの立体構造に基づくRNA/RNPの分子デザイン
- ・分子デザインされたRNA/RNPの実際の構築とその機能の解析
- ・Volvoxの多細胞体制構築にかかわる遺伝子とタンパク質の解析
- ・植物のMADSボックスタンパク質によって制御される遺伝子の解析

RNAの動的機能と

Volvoxの遺伝子発現



Tetrahymena ribozyme

Volvox carteri

<http://kuchem.kyoto-u.ac.jp/seika/>

○細胞周期学分野

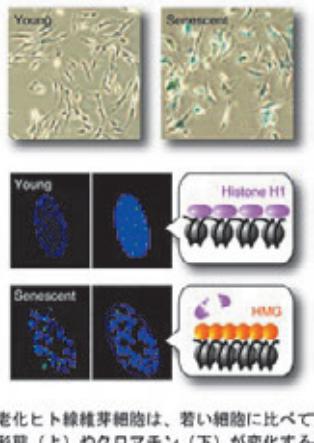
Laboratory of Cell Cycle Regulation

研究内容

染色体機能ドメインが細胞周期、個体生活誌、あるいは細胞の老化やがん化などの病的状態において、どのように機能し維持されるかを遺伝学的、細胞生物学的、分子生物学的に研究する。

主な研究項目

- ・分裂酵母、アフリカツメガエル、ほ乳類におけるテロメア構造と機能の解明
- ・テロメア機能の異常が細胞の老化、がん化に果たす役割の研究
- ・ヘテロクロマチン構造の細胞周期にわたる維持機構
- ・生殖細胞系列、未分化細胞における染色体維持機構



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/fish/>

○分子継承学分野

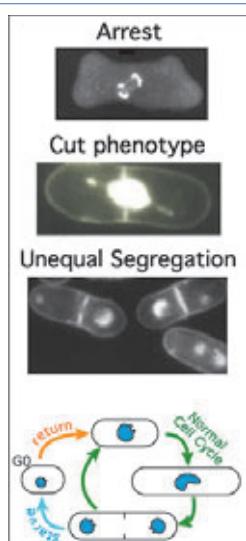
Laboratory of Molecular Inheritance

研究内容

細胞増殖に伴う染色体DNAの複製と娘細胞への分配機構とその制御を、分子細胞生物学的に把握する研究を行う。

主な研究項目

- ・分裂期染色体凝縮制御因子
- ・分裂期染色体分離機構
- ・姉妹染色体分体結合因子
- ・動原体等の染色体機能基本因子の構築
- ・細胞周期特異的蛋白質分解
- ・複製およびG2/Mチェックポイント制御因子
- ・ポストゲノム、質量分析による染色体制御因子の探索



<http://kozo.biophys.kyoto-u.ac.jp/>

○多細胞体構築学講座

Department of Cell and Developmental Biology

多様な生命体の多細胞体制構築の基本概念と原理をその多細胞体（組織・器官あるいは個体）の機能発現との関連について理解を深める。

○細胞認識学分野

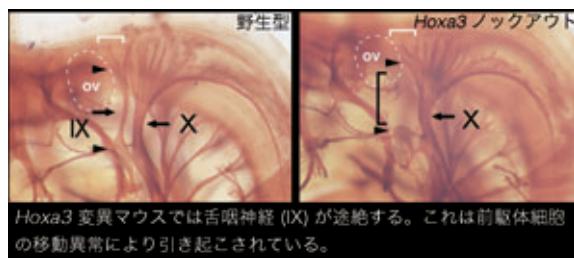
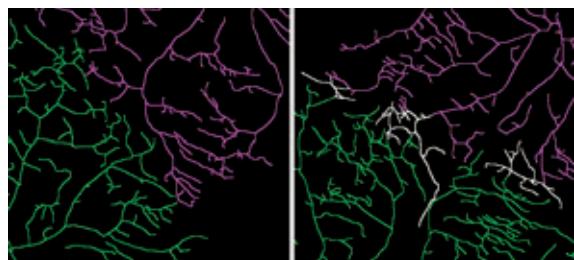
Laboratory of Cell Recognition and Pattern Formation

研究内容

動物発生における器官形成、特に神経回路や上皮の形成と、それぞれの機能発現を調節する細胞間相互作用に注目する。ショウジョウバエを用いた遺伝学的手法に加えて、哺乳類の細胞・器官培養やノックアウトマウスも用い、分子細胞生物学的アプローチを総合して研究する。

主な研究項目

- ・神経突起の伸長・分岐パターンとその多様性を生む機構
- ・上皮の極性を調節するシグナル伝達機構
- ・マウス胚での細胞移動を制御する分子機構



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/cellpattern/>

統合生命科学専攻

○シグナル伝達学分野

Laboratory of Signal Transduction

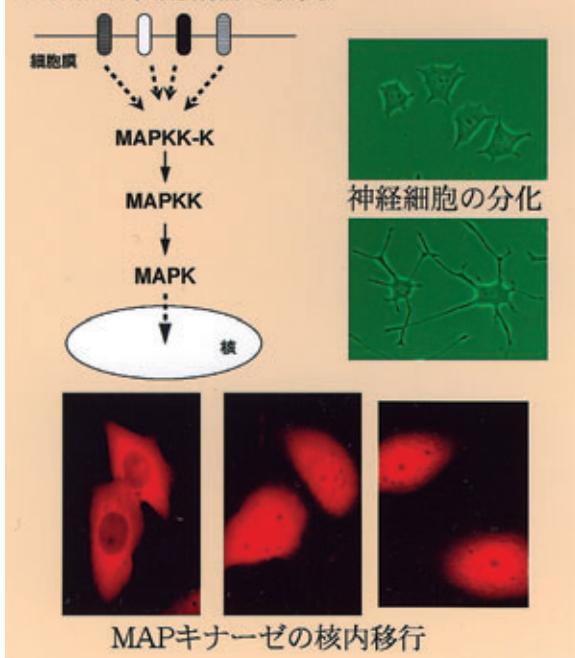
研究内容

細胞増殖・細胞分化、発生並びに高次生命機能のシグナル伝達の研究をする。

主な研究項目

- ・細胞内シグナル伝達の分子機構
- ・初期胚発生の分子機構
- ・神経分化のシグナル伝達機構
- ・核・細胞質間輸送の分子機構
- ・寿命制御のシグナル伝達
- ・細胞分裂期制御の分子機構

シグナル伝達機構の研究



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/signal/>

○細胞全能性発現学講座

Department of Plant Gene and
Totipotency

生物細胞の全能性の基本原理の探求と応用分野への展開を目指し、種々の生物ゲノム解析を通して、その普遍性ならびに多様性を探索するとともに、細胞の全能性を分子レベル、細胞レベル、個体レベルで解析し、生物の多様なる機能の基本システムに関して考察する。

○遺伝子特性学分野

Laboratory of Plant Molecular Biology

研究内容

モデル光合成生物を用いて植物細胞の全能性の基本原理を解明する。光やCO₂などの環境因子の認識やシグナル伝達、頂端分裂組織の維持と分化、生殖細胞の決定と分化の分子機構を分子遺伝学的に研究する。

主な研究項目

- ・光受容とシグナル伝達
- ・植物光生理応答の遺伝制御
- ・植物細胞におけるCO₂濃縮の分子機構
- ・光合成生物の比較ゲノム解析
- ・植物の生殖生長と性分化



○応用生物機構学講座

Department of Applied Molecular Biology

多様な自然環境の変化に対応して生物が獲得した情報応答機構を、個体、器官、組織、細胞および分子のレベルで解明し、その応用に関する研究を行う。

○生体情報応答学分野

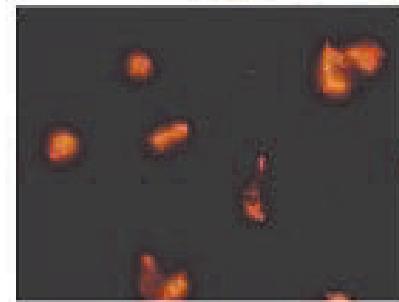
Laboratory of Biosignals and Response

研究内容

天然物から有用な生理活性を有する物質を様々な活性測定系を用いてスクリーニングし、その単離・同定を行う。生体の情報応答の分子機構を、遺伝子発現調節及びタンパク質機能の発現調節を中心にして解明し、その応用に関する研究を行う。

主な研究項目

- ・天然物からの有用な生理活性物質の単離・同定
- ・外部刺激に対する動物細胞・個体の応答現象の解明



植物由来成分による細胞骨格（アクチン）の変化

○全能性統御機構学分野

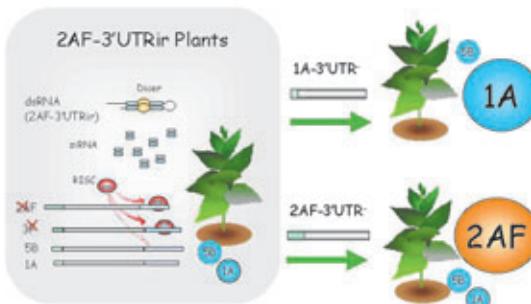
Laboratory of Molecular and Cellular Biology of Totipotency

研究内容

植物細胞が示す高い分化全能性機能を分子・細胞・個体レベルで解析する。このため種々の特性ある細胞の機能分化について分子細胞生物学的に解析するとともにその応用に関する研究を行う。

主な研究項目

- ・植物細胞の組織分化全能性とその統御機構
- ・細胞小器官（特に葉緑体）の増殖・分化とその統御機構
- ・葉緑体機能発現とその応用、特に、酸素発生系について
- ・ストレス環境における細胞応答と耐性機構
- ・二次代謝機能発現と有用物質の生産
- ・RNAiを用いた遺伝子・代謝ネットワークの解析
- ・植物二次代謝系の多様性と進化の解析



differential RNAi (dRNAi) と遺伝子相補／置換の利用によるファミリー遺伝子の解析。植物に多く存在する多重遺伝子群に対して、dRNAiにより個別の遺伝子を特異的に発現抑制する、あるいは、保存配列に対するRNAiを用いて包括的に抑制した後、標的部位を変異させた遺伝子を導入することにより、遺伝子機能を個別に解析することが可能となってきた。ここでは、タバコの酸素発生系PsbP遺伝子ファミリーにおける遺伝子置換を示す。

<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/callus>

<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/seitaijoho/>

統合生命科学専攻

○微生物細胞機構学分野

Laboratory of Applied Molecular Microbiology

研究内容

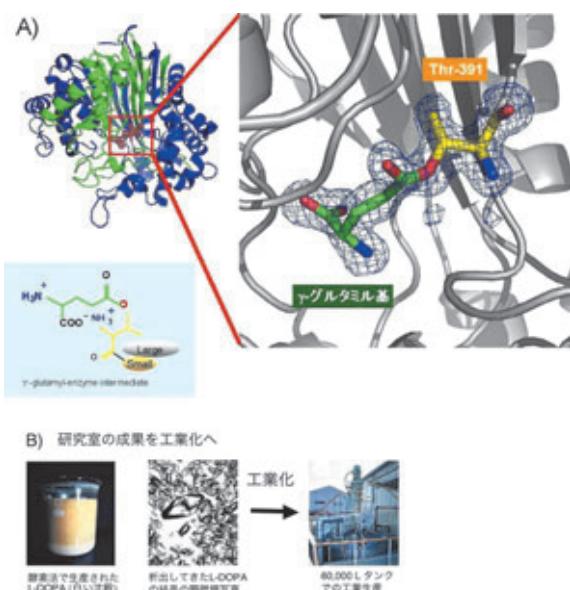
かび、酵母、バクテリア、放線菌などの微生物の様々な生命現象を遺伝子、タンパク質などの分子のレベルで解析、解明する。これらの結果を環境、食品、医療分野へ応用する研究を行う。

主な研究項目

- a) アミン、アミノ酸、ペプチドの代謝に関する微生物酵素の立体構造、触媒機構、発現調節機構、生理的機能等の解明および食品、医薬、環境などへの応用に関する研究。
- b) これらの酵素の発現を調節するタンパク質の解析とその利用研究。
- c) 酵母の細胞表層レセプターや血小板活性化因子について、その細胞機構や情報伝達機構を分子および細胞レベルで究明する。

図A γ -グルタミルトランスペプチダーゼの構造 (γ -グルタミル酵素中間体)

図B 微生物酵素によるL-DOPAの生産



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/bisei/>

○分子応答機構学分野

Laboratory of Molecular Biology of Bioresponse

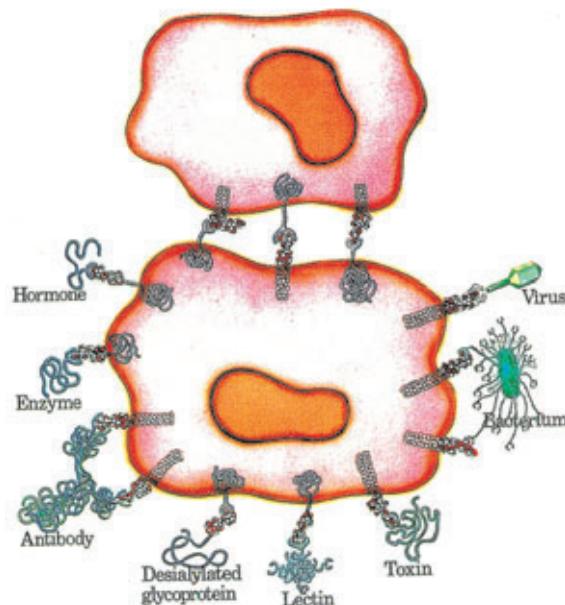
研究内容

生物の分子応答に関する基本原理の解析と分子応答機構を応用へと展開する研究を行う。特に糖鎖を介した分子応答機構の解析とその応用、mRNAの成熟と輸送機構ならびにゲノム安定性の維持機構について研究する。

主な研究項目

- ・微生物酵素による分子応答機構の解析
- ・糖鎖分子の機能解析とその応用
- ・糖鎖を介した微生物の接着機構
- ・微生物の接着による分子応答機構
- ・mRNAのスプライシングと細胞質への輸送制御機構
- ・mRNAの転写に伴うゲノムの安定性を維持する機構の解析

糖鎖の機能



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/molecule/>

◎環境応答制御学講座

Department of Responses to Environmental Signals and Stresses

生物の、内的・外的（生物的・非生物的）環境に対する応答に関する情報素子の構造・機能相関の解析、外的（生物的・非生物的）環境に応答した発生・分化過程の調節機構の解析などをとおして、生物の多様な環境応答機構の基本システムを解明する。

○分子代謝制御学分野

Laboratory of Plant Developmental Biology

研究内容

植物が示す内的・外的環境（非生物要因・生物要因）へのさまざまな応答現象を研究する。基盤をなす分子機構の解明と現象の解析を通して新たな調節様式の発見をめざす。

主な研究項目

- ・成長相の転換（特に花成）を調節する分子機構
- ・長距離作用性情報高分子の輸送と作用の分子機構
- ・頂端分裂組織の維持と細胞分化におけるエピジェネティックな調節機構
- ・窒素固定根粒形成と菌根形成の分子機構



<http://www.plantp.kais.kyoto-u.ac.jp/>

○分子情報解析学分野

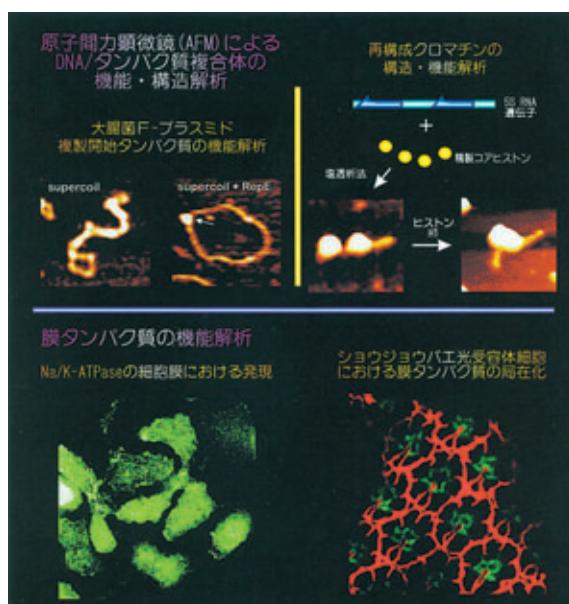
Laboratory of Membrane Proteins and Nuclear Signaling

研究内容

細胞膜・細胞核のナノバイオロジー

主な研究項目

- 膜タンパク質の構造・機能協同
 - ・機能ドメインの同定
 - ・局在化機構の解明
 - ・動植物細胞の膜輸送機構の解析
 - ・合成・崩壊過程に関与する因子の同定・解析
- クロマチンの構造・機能協同
 - ・クロマチン高次構造の解析
 - ・クロマチンを介した遺伝子発現機構の解明
 - ・染色体の複製機構の解明



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/chrom/>

統合生命科学専攻

協力講座

○形態形成学講座

Department of Molecular and Developmental Biology

脊椎動物の形態形成機構を追求する。

○ゲノム維持機構学分野

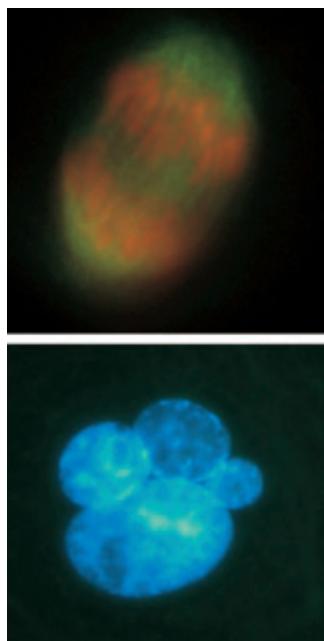
Laboratory of Genome Maintenance

研究内容

放射線、化学物質、その他のストレスは、染色体の正確な複製と分配にとって障害となる。染色体におこった障害が修復されるまで細胞周期の進行を停止する各種チェックポイントはゲノム維持に不可欠な監視機構である。チェックポイントの分子メカニズムについて酵母、ヒト培養細胞を用いて研究する。

主な研究項目

- ・スピンドルチェックポイントの分子メカニズム
- ・染色体分配機構
- ・DNA損傷応答メカニズム
- ・チェックポイント欠損による癌化経路



スピンドルチェックポイントが正常に機能した場合にみられる有糸分裂期の染色体分離（上図）と、このチェックポイントを強制解除した場合に見られる多核形成（下図）。

http://www.rbc.kyoto-u.ac.jp/radiation_system/m-index.htm

○細胞機能動態学講座

Department of Molecular and Cellular Biology

個体の発生、分化、老化ならびに免疫等における制御について、分子遺伝学的手法および発生工学的手法をもちいて、分子・細胞・個体レベルでの研究を展開する。

○細胞情報動態学分野

Laboratory of Molecular Cell Biology

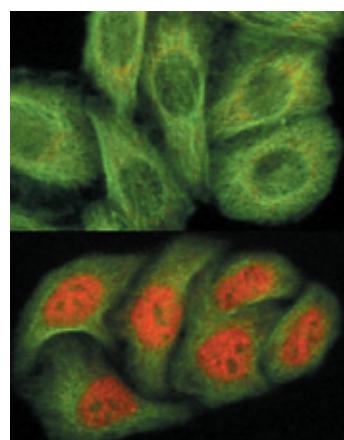
研究内容

ウイルスが細胞に感染し、複製を開始したことを感知し、転写因子IRF-3の核への移行等の抗ウイルス反応が開始する。このことは自然免疫機構として重要であり、その後に誘導される抗体産生などの獲得免疫の誘導に重要である。このウイルス感染によって誘導される一連の反応を解明することを目的に研究を進めている。最近の知見では二重鎖RNAなどのウイルス複製による産物が、RNAヘリカーゼを活性化してこの反応を誘導していることが明らかとなった。さらに宿主由来のRNAもこの制御に関与していることが示唆されてきている。進化的にはRNAiとの関連が見出されており、発生、分化との関連についても研究を進めている。

主な研究項目

RNAヘリカーゼRIG-Iファミリーの機能解析。ウイルス感染によるインターフェロン遺伝子の活性化機構。ウイルス蛋白質による自然免疫機構阻害の研究。C型肝炎ウイルスの複製と自然免疫機構。

非感染



感染後

<http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/Lab/bunshiiden/index.html>

○信号伝達動態学分野

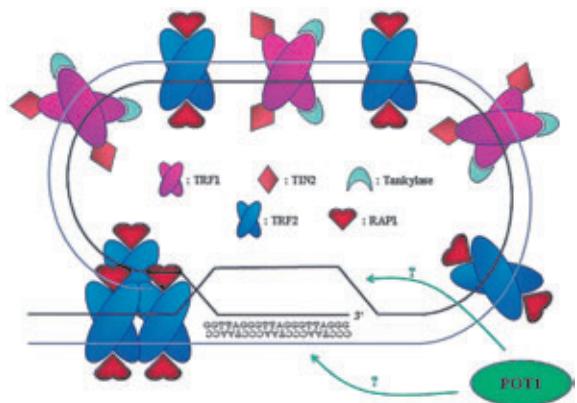
Laboratory of Mammalian Molecular Biology

研究内容

ほ乳類の発生、細胞の分化・増殖、不死化の分子機構を明らかにするために、特に、発生工学的手法を用いて作成するモデル動物を活用することによって、これらの生命現象をコントロールしているシステムを分子レベルで解析していく。

主な研究項目

- ・発生や細胞の分化・増殖に関与する遺伝子のクローニング
- ・新規遺伝子のノックアウトマウスの作成と解析
- ・蛋白質メチル化酵素の機能解析
- ・細胞の老化、特にテロメア維持に関わる分子の解析



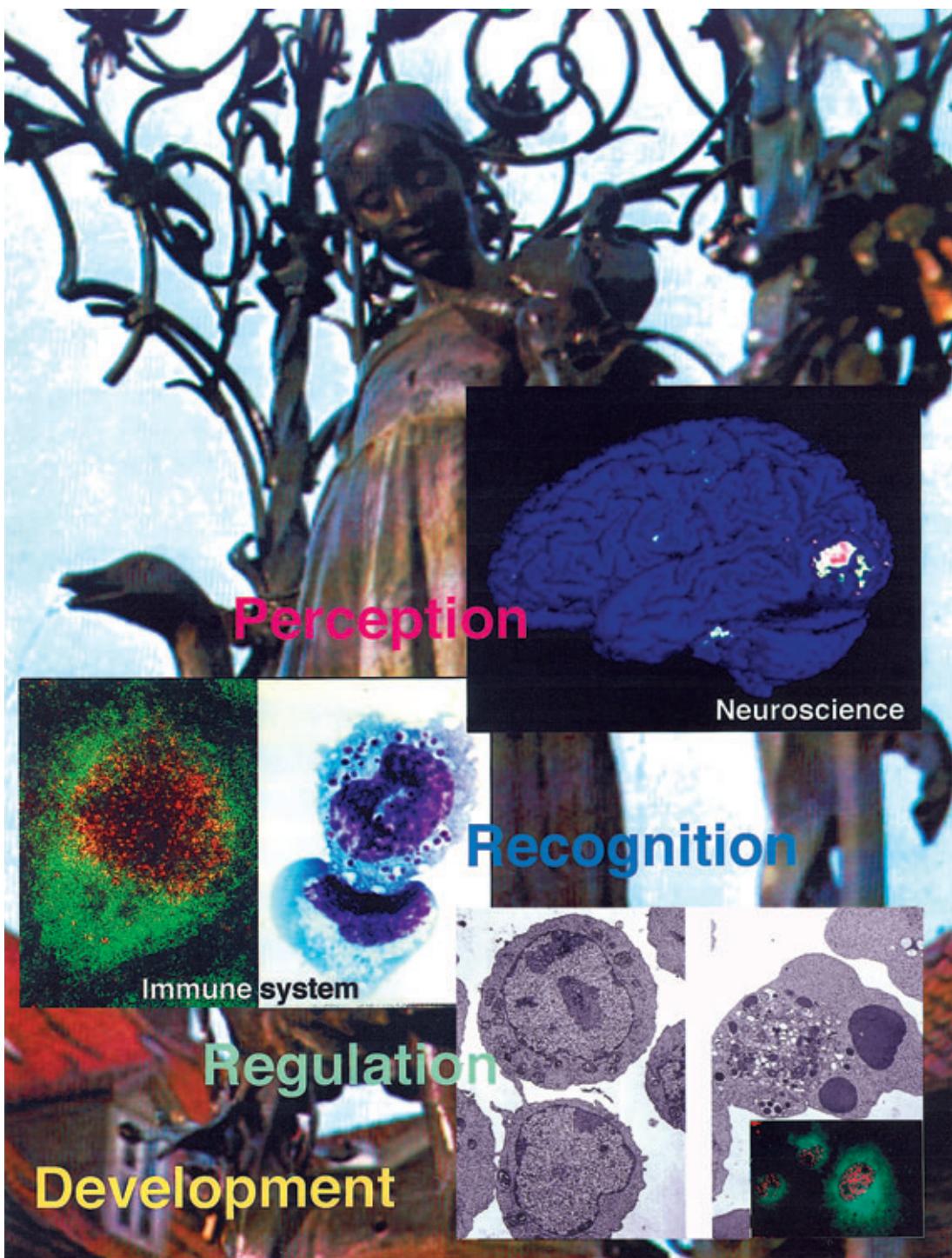
Histone methylation versus histone phosphorylation and Acetylation



<http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/Lab/mousemodel.htm>

本専攻は、生命体の認知と情報統御のメカニズム、高次生命体の構築機構のメカニズム、ならびに種々の因子による細胞の増殖機構、免疫系の自己・非自

己の認識機構等の生体の応答メカニズムの基本原理の解明に関する教育と研究を行う。



基幹講座

○認知情報学講座

Department of Molecular and System Biology

生命体の認知と情報制御のメカニズムを明らかにするために、脳・神経系の認知、感覚、記憶、学習、情動、思考、運動などの高次脳機能の分子メカニズムを解析する一方、細胞増殖シグナルの蛍光イメージングとシミュレーションモデル構築とを用いて、分子レベルから高次脳機能まで情報処理機構の基本原理を幅広く研究する。

○高次脳機能学分野

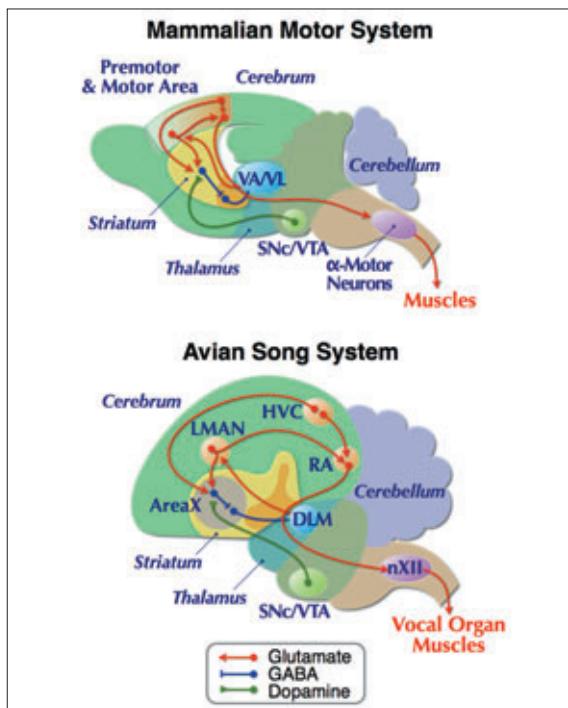
Laboratory of Neuroscience

研究内容

様々な高次脳機能の獲得・制御メカニズムを分子からシステムレベルで研究し、中枢神経系における情報処理プロセスを明らかにする。

主な研究項目

- ・神経伝達の制御・可塑性の分子機構
- ・機能的神経ネットワーク形成の分子機構
- ・感覚系における情報処理機構
- ・運動学習・制御の神経機構



哺乳類の運動系神経回路と鳥類の音声制御系神経回路
大脳一基底核一視床からなる相同的な神経ネットワークにより構成されている。

○生体制御学分野

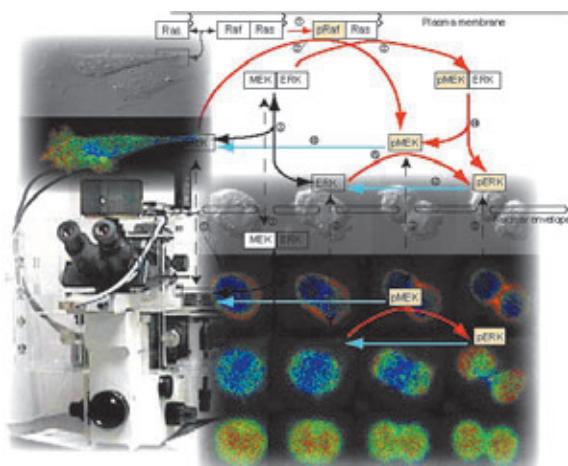
Laboratory of Bioimaging and Cell Signaling

研究内容

細胞内情報伝達機構をイメージング技術により時空間的に解析し、そのデータをもとに細胞内情報伝達ネットワークを仮想空間上で再構築する。

主な研究項目

- ・細胞増殖因子情報伝達系を可視化する蛍光プローブの作成とイメージング
- ・細胞増殖因子情報伝達系のシミュレーションモデルの構築
- ・細胞がん化過程のイメージング
- ・細胞運動や小胞輸送を制御する情報伝達系の解析



<http://www.path1.med.kyoto-u.ac.jp/mm/index.htm>

高次生命科学専攻

○体制統御学講座

Department of Animal Development and Physiology

生体は、細胞、組織、器官、個体という異なった階層から構成され、これらの統御を通じて体制の構築と維持を図ることが可能となる。この機構を明らかにすることを目的とし、細胞の分化や死、細胞間の相互作用、組織、器官の形成について、時間軸を考慮しながら、個体構築と維持におけるメカニズムの基本原理を分子・細胞・個体レベルで追求する。

○生体防御学分野

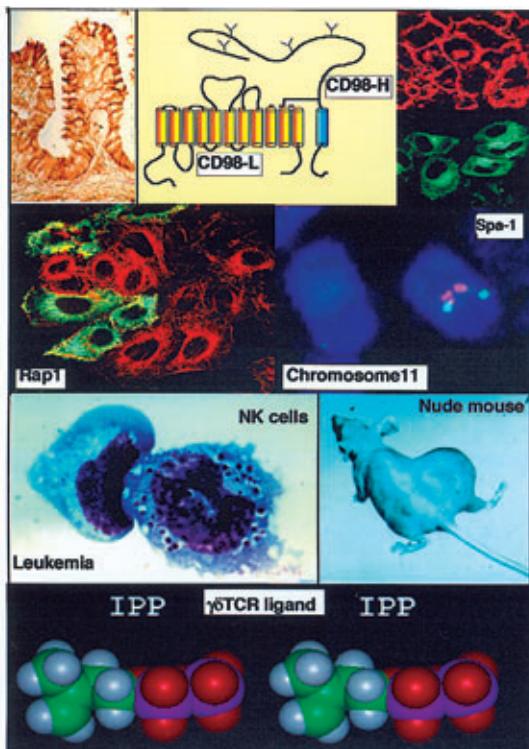
Laboratory of Immunology and Cell Biology

研究内容

高次生体制御システムとしての免疫系の成立と、その認識および機能発現機構の原理を遺伝子から細胞、さらに個体レベルにわたって研究する。

主な研究項目

- ・免疫学的応答性と不応答性（寛容）の制御機構
- ・免疫系細胞の発生と分化の分子機構
- ・免疫系細胞のエフェクター機能、特に殺細胞機能の分子機構
- ・癌免疫応答の機構とその制御
- ・免疫記憶成立の分子機構



○高次遺伝情報学分野

Laboratory of Developmental Cell Biology

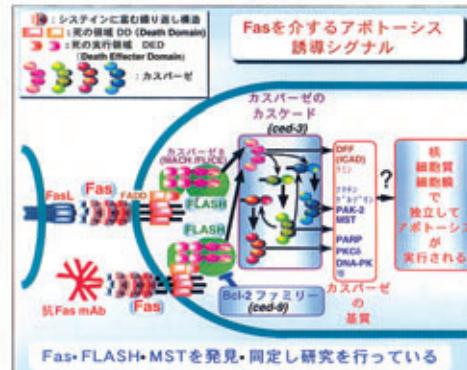
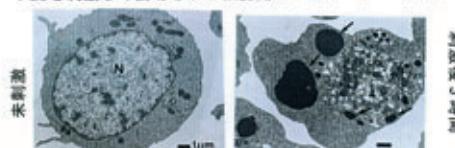
研究内容

プログラムされた細胞死（アポトーシスを含む）を中心に、免疫・発生・発がん等の問題を分子・細胞・生体レベルで研究する。アポトーシス誘導シグナルを伝達する細胞表層レセプター分子Fasからのシグナル伝達の分子機構と生理機能の解明を目指して研究を行う。また、これらの課題と関連して、免疫系や細胞のがん化または個体発生時などで機能する分子の探索を行う。

主な研究項目

- ・Fasからのシグナル伝達機構
- ・Fas下流のシグナル伝達分子の多様な生理機能の解析
- ・新たなシグナル伝達分子FLASH
- ・新たな細胞死誘導分子機構の探索
- ・細胞死を阻止する生存シグナルの解析
- ・遺伝子破壊マウスの作製と解析
- ・細胞のがん化と細胞死
- ・免疫と細胞死
- ・個体発生と細胞死

Fasを刺激して誘導される細胞死はアポトーシスである



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/Fas/>

○生体応答学分野

Laboratory of Immunobiology

研究内容

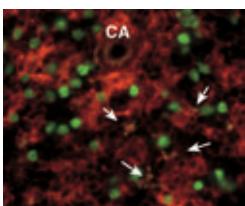
生体の恒常性維持の視点から、高次生命体の非自己認識機構を分子・細胞・個体レベルで解析すると共に、誘導される応答の制御機構を明らかにするための研究を行う。

主な研究項目

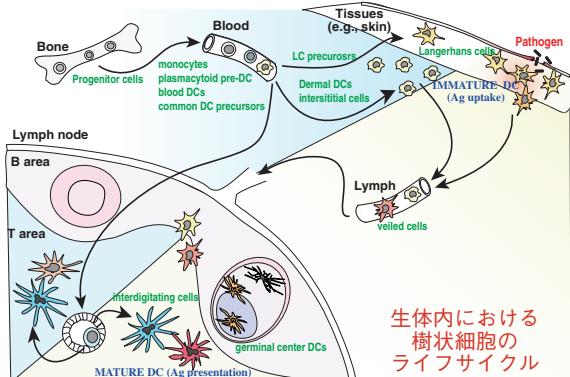
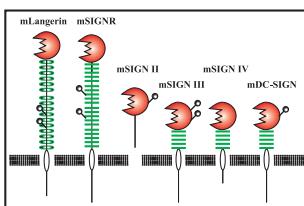
・抗原提示細胞

- ・生体内における樹状細胞の動態と機能変化に関する研究
- ・樹状細胞の抗原提示機構/T細胞活性化機構の解明
- ・樹状細胞における死細胞の取り込み機序とその後の免疫応答の解析
- ・腫瘍免疫における樹状細胞の作用の解析
- ・免疫寛容の誘導とその成立機序の解析
- ・レクチン分子による異物認識機構と捕捉機序の解明

樹状細胞における死細胞の取り込み



異物認識セレブターとしてのレクチン



生体内における
樹状細胞の
ライフサイクル

<http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/imm/>

○分子病態学分野（連携講座）

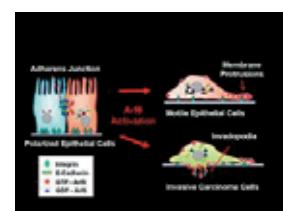
Laboratory of Molecular Cell Biology

研究内容

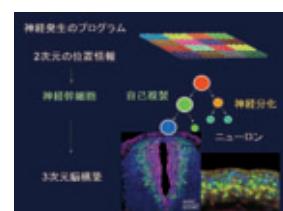
生殖系列と脳神経系の形成、組織構築と癌化の基本的機構の研究

主な研究項目

- ・上皮構造形成とインテグリティ維持
- ・カドヘリンとインテグリン連携の原理的機序
- ・癌悪性度進展におけるエビジェネティック過程
- ・脳構築の遺伝的プログラムと可塑的メカニズム
- ・神経幹細胞の自己複製と分化のメカニズム
- ・細胞極性と非対称分裂の制御機構
- ・マウス生殖細胞の形成機構とその再構成
- ・生殖細胞でのエピゲノム再編成の分子機構
- ・単一細胞マイクロアレイ法の応用と発展



佐邊研究室 <http://www.sabelab.jp/>



松崎研究室 <http://www.cdb.riken.jp/jp/matsuzaki/>



斎藤研究室 <http://www.cdb.riken.jp/jp/saitou/>

高次生命科学専攻

◎高次応答制御学講座

Department of Signal Transductions

高次生命体は、遺伝子の情報によって自律的に制御されると同時に外界に対して常に対応できる体制を整えている。この結果、遺伝情報及び応答機構の異常は、癌や自己免疫疾患、成人病を発症するに至る。種々の因子による細胞の増殖機構、免疫系の自己・非自己の識別機構等の生体の基本的な応答機構、一方、癌、免疫疾患、遺伝病、成人病等の生体の異常機構を解析し、生命体の応答制御の基本原理を追求する。

○生体システム学分野

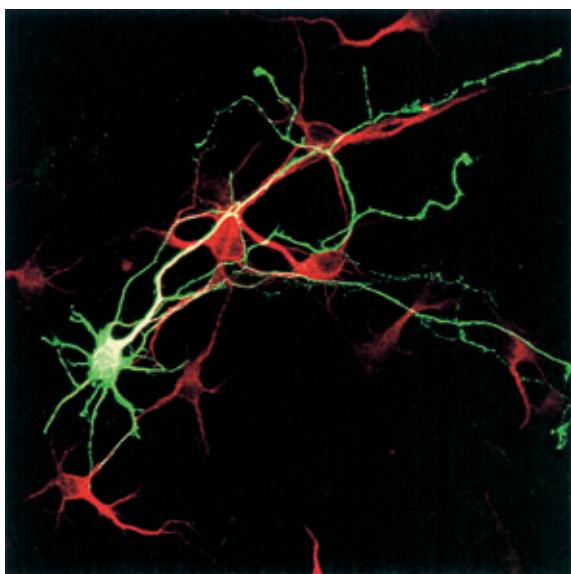
Laboratory of Molecular Neurobiology

研究内容

脳、神経系の形成にかかわる情報伝達の分子メカニズムの解明

主な研究項目

1. 神経回路形成におけるG蛋白質の機能
2. 神経軸索ガイダンス分子の情報伝達機構
3. シナプス形成におけるG蛋白質の機能



GFPを発現させたラット海馬の神経細胞の初代培養
(Green: GFP; Red: MAP2)

RhoファミリーG蛋白質は神経突起形成の重要な調節分子である。

<http://www.users.kudpc.kyoto-u.ac.jp/%7Ep51907/index-e.html>

○システム機能学分野

Laboratory of Membrane Biochemistry and Biophysics

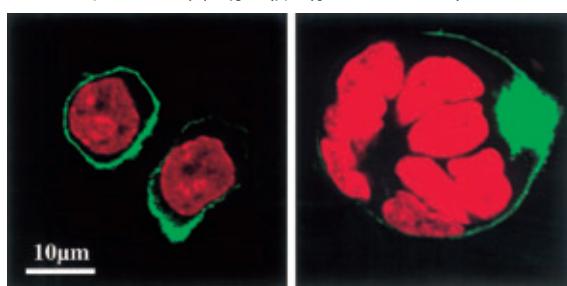
研究内容

細胞応答反応の中心の場として生体膜をとらえ、生体膜上で起こる脂質、糖鎖、タンパク質の相互作用をシステムとして理解することにより、細胞応答制御機構を研究する。

主な研究項目

1. スフィンゴ脂質が関与するシグナル伝達機構に関する研究
2. 細胞死誘導型免疫抑制剤の作用機構に関する研究
3. シアル酸分子種の生物学的役割に関する研究

スフィンゴ脂質の変化によって生じた多核細胞(右)。
左はコントロール。図の赤は核、緑はアクチンを染めたもの。



<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/kozutsumi/>

◎高次生体統御学講座

Department of Functional Biology

生体は1つの統一された実体として存在する。このために、脳、神経系、免疫系、内分泌系、循環器系は相互に関連して生体を制御し機能している。生体の統一された機能発現のメカニズムと制御機構を追求する。

○高次生体統御学分野

Laboratory of Functional Biology

研究内容

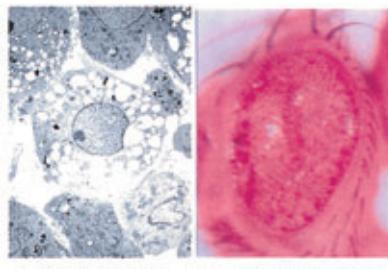
モデル動物を用いて神経変性疾患、発癌、肥満等の基本原理を研究する。

主な研究項目

当分野は、生体における高次統御系の研究として以下の3つのヒトの疾患をとりあげ、これらの疾患で、どのように生体統御系が破綻しているかを研究している。

1. アルツハイマー病、パーキンソン病、ハンチントン舞蹈病などの神経変性疾患で、神經細胞の生存や機能の維持が破綻する分子メカニズムの解明とその予防・治療を目指した研究。
2. がん細胞で破綻している細胞死のメカニズムを解明し、その破綻を修復することによって、がん細胞特異的に細胞死を引き起こす新しい治療戦略を樹立することを目指した研究。
3. 肥満・糖尿病で破綻している生体内でのエネルギー・脂質代謝の調節機構を核内受容体の作用という視点から解明することを目指した研究。

モデル動物を用いた神経変性疾患の研究



培養神經細胞モデル ショウジョウバエモデル



ラット・マウス モデル

<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/labs/funcbiol/>

○生命文化学講座

Department of Biostudies and Society

生命科学の飛躍的発展に伴い内在する種々の問題を倫理的な視点も含めて理解することを目的に、生命科学の基礎的研究の歴史と動向を把握し問題点を明らかにする。

○生命文化学分野

Laboratory of Science Communication and Bioethics

研究内容

1. 研究から得られる知識（情報）と知恵を社会と共有するための科学コミュニケーションの実践と研究を行う。
2. 生命科学研究の実践と理解を基礎に置き、かつ、人文科学的ならびに社会科学的視点を取り入れ生命倫理学ならびに現代科学史を研究する。

主な研究項目

- ・研究情報の専門外への発信・伝達の方法の研究と開発
- ・研究現場での取材を通じた現代科学史の研究
- ・生命倫理問題の分析と対応方法についての研究

現代の生物学・生命科学

(1) 学問としての発展と総合化

○分子レベルの理解の深まり

○「分子-細胞-組織-個体-生態系」という生物世界のすべての階層を対象とする研究の進展

○多くの有用な知識や知恵が生まれる一方、高度化・専門化が進行

(2) 基礎研究と応用技術の距離が近くなった

生命現象のメカニズムの研究→ダイレクトに応用技術につながる

(3) 一般市民の生活の中に生命科学由来の技術が広まり始めている

遺伝子組み換え作物、クローン牛、ヒトゲノム解析、遺伝子診断ほか

生命科学の「知識と知恵」を広く共有すること
(科学コミュニケーション)

倫理的問題を把握し、対応の方法を考えること
(生命倫理・現代科学史)

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~kato/>

高次生命科学専攻

協力講座

○高次生体機能学講座

Department of Mammalian Regulatory Network

複雑な高次生命現象における遺伝子応答・生体防御の分子メカニズムおよび疾患の発症機序を追求する。さらに、ウイルスやモデル動物を利用して高次生命体の形成・維持を担う生命シグナルの制御ネットワークを明らかにし、高次生体機能の基本原理を追求する。

○高次細胞制御分野

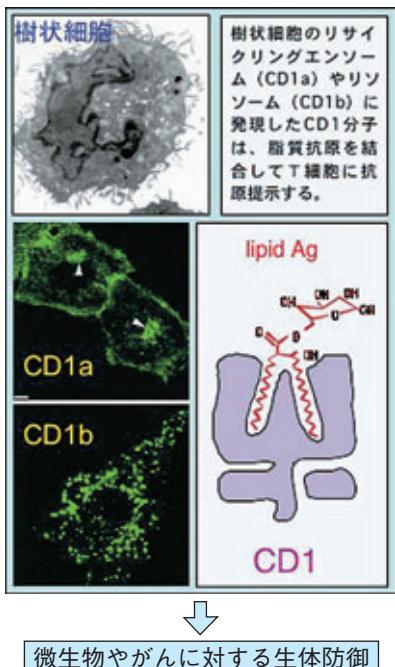
Laboratory of Cell Regulation and Molecular Network

研究内容

樹状細胞に発現したCD1分子は、微生物やがん細胞由来の脂質抗原をターゲットにした免疫応答を担う新しいタイプの抗原提示分子である。この生体防御システムの成立基盤を細胞レベル、生体レベルで解明するとともに、その制御法の確立を通して、脂質をベースにした新たなワクチン開発を目指す。

主な研究項目

- ・CD1分子の細胞内トラフィ킹の分子機構
- ・病原体脂質に対する生体応答基盤の解明
- ・がん細胞特異的脂質の解析



○生体動態制御学分野

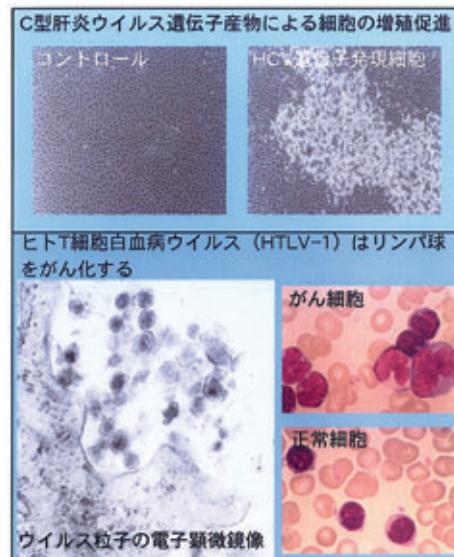
Laboratory of Viral Oncology

研究内容

高次生命体の維持及び細胞の増殖機構を分子レベルで明らかにすることを目的とする。ウイルス感染によって誘導される高次生命体あるいは細胞の増殖変化は、外からの刺激に対する応答、あるいはウイルス蛋白質による感染個体や細胞における増殖制御の結果として捉えることができるので、ウイルス感染系をモデルとしてこれらの現象の分子機構を特にがん化との関連で明らかにする。またウイルス増殖系を分子レベルで解析し、ウイルス感染防御及び感染個体からのウイルスの排除による疾患予防に関する研究も行う。

主な研究項目

- ・がんウイルス遺伝子による細胞増殖制御機構
- ・がんウイルス遺伝子による細胞の形質転換、がん化の分子機構
- ・ウイルス感染による細胞のアポトーシス制御
- ・ウイルス感染による転写、翻訳制御機構
- ・ウイルスの複製機構
- ・ウイルス増殖を抑制する細胞の機能解明



○高次情報制御学分野

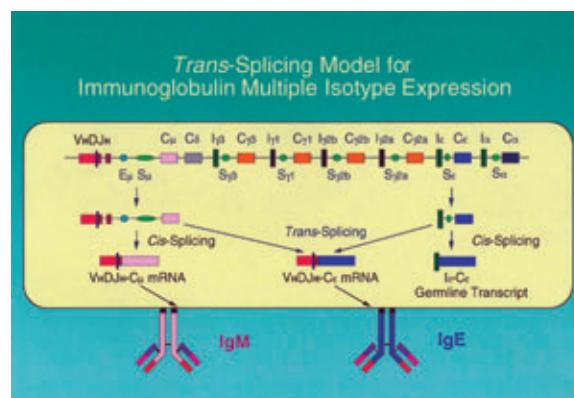
Laboratory of Genetic Information

研究内容

免疫系・神経系などの高次生命機能にかかる遺伝子の構造・発現とその制御・処理機構の基本原理を、モデル動物などを用いて解明する。

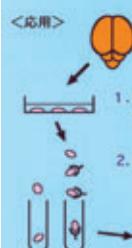
主な研究項目

- ・抗体遺伝子の発現・組換えとその制御の分子機構
- ・抗体遺伝子組換え機構の分子進化学的解析
- ・自己免疫性腎炎発症機構の分子生物学的解析
- ・T細胞サブセットの選択的集積機構
- ・Krüppel-like 転写因子による転写抑制の分子機構
- ・シグナルシーケンストラップ法によるサイトカイン遺伝子の単離
- ・神経系幹細胞表面マーカー群同定と幹細胞移植
- ・中枢神経幹細胞増殖因子ノックアウトマウス作製
- ・SDF-1によるエイズ発症遅延動物モデル作製
- ・エイズ発症遅延型 SDF-1 遺伝子の分子機構

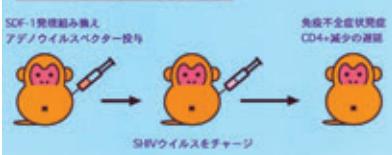


神経系幹細胞移植にむけた分子生物学的課題

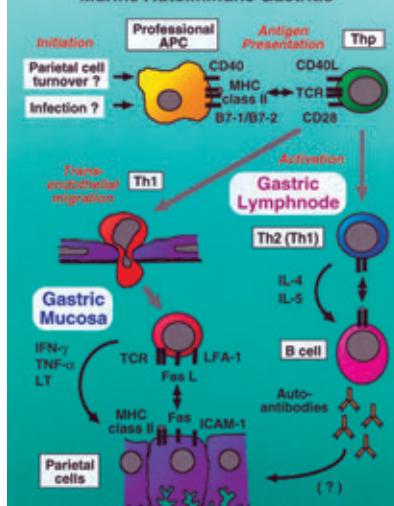
1. bFGFとEGF以外の支持因子を単離する。
2. 神経系幹細胞特異的表面マーカー群を同定する。



SDF-1によるAIDS発症遅延



Possible Mechanism of Target Tissue Destruction by Effector Cells in Murine Autoimmune Gastritis



講義科目の説明

【修士課程】

統合生命科学特別実験及び演習第1 Experimental Course of Integrated Life Sciences and Seminar 1

各研究分野における学生の研究テーマに関連した基礎知識を教育し、実験および演習を行うことにより研究の基本を修得させる。

統合生命科学特別実験及び演習第2 Experimental Course of Integrated Life Sciences and Seminar 2

細胞周期制御、細胞増殖に伴う染色体DNAの複製と、娘細胞への分配機構と制御・遺伝子伝達学、遺伝子動態学、神経系の発生における細胞の認識機構、多細胞体構築と高次生命機能のシグナル伝達、外来遺伝子導入と形質発現の解析、植物細胞の分化全能性、機能発現、動物・植物・微生物の環境応答機構、生物の示す多様な内的・外的環境への応答とその分子機構、細胞の増殖・分化・死に関して研究テーマをもって実験を行いつつ、最近の研究の動向を調査させ、研究の方向を総合的に理解する演習を行う。

高次生命科学特別実験及び演習第1 Experimental Course of Systemic Life Sciences and Seminar 1

各研究分野における学生の研究テーマに即した基本的な実験技術、実験結果の評価、研究の進め方などに関する指導を行い、研究への応用力を養わせる。

生命文化学特別実習及び演習第1 Practical Course and Seminar of Science Communication, Bioethics and History of Bioscience 1

科学コミュニケーションの実践及び結果の分析の手法、さらには生命倫理と現代科学史に関する資料収集、分析方法などに関する指導を通して、研究の進め方を身につける。

高次生命科学特別実験及び演習第2 Experimental Course of Systemic Life Sciences and Seminar 2

生命体の認知と情報制御、高次生命体の構築と応答、細胞分化・増殖や生体の制御、癌、免疫疾患、遺伝病、成人病、外界の情報を認識し細胞内に伝達する分子装置である膜蛋白質の構造形成・細胞および高次生命体の情報物質からの伝達制御の各研究分野において、多様な研究手法、最新の研究成果に習熟させるとともに、研究の評価、批判の方法を学ばせる。

生命文化学特別実習及び演習第2 Practical Course and Seminar of Science Communication, Bioethics and History of Bioscience 2

特別実習及び演習第1で学んだ内容をさらに深める指導を行い、実践と研究への応用力を養う。

生命科学と社会 Biostudies and Society

(加藤(和)准教授)

20世紀後半に爆発的な発展を遂げた生命科学の成果は、広く日常生活に浸透し始めている。今後の生命科学研究に携わる研究者は、生命科学の多面的な進歩を理解し、社会との関係を見極める能力を持つことが重要である。そのために必要な生命倫理・医療倫理、および社会とのコミュニケーションについて論じる。

科学ライティング・科学コミュニケーション Science Writing and Science Communication

(加藤(和)准教授)

生命科学研究に関する情報を非専門家に発信・紹介するためのコミュニケーションの手法と課題について論じる。1)新聞記事の執筆という実践的演習を通して、新聞メディアの役割について考える。2)マスメディア、インターネット、研究者参加型など、多様な科学コミュニケーション活動の特徴と課題について論じる。

生命倫理学 Bioethics

(加藤 (和) 准教授)

生命科学の発展に伴い生じる倫理的・社会的問題に対する国内外の取り組みの現状について、基礎生命科学、医学、農学、環境などの分野からいくつかの具体例を取り上げ、講述する。生命(いのち)とは何か、人の尊厳とは何かを考え、人として研究者として行動するための基礎的理を深めることを目標とする。

生命科学特論A Advanced course in life science A

(井上教授・石川教授・永尾教授・白石准教授)

生命科学に関する基本的な事象と考え方について分子、細胞、個体レベルで講述し、研究にもちいる実験手法と実験結果の評価について合わせて解説する。

生命科学特論B Advanced course in life science B

(河内教授・佐藤教授・荒木教授・福澤准教授・畠准教授・遠藤講師)

植物が持つ多様な生命現象の中からいくつかのトピックスを取り上げ、個体、細胞、分子のレベルで講述する。また、近年の研究の発展の原動力となった技術や概念上の革新や産業への応用といった側面も取り上げる。これらを通して、植物の生命科学を俯瞰する。

生命科学特論C Advanced course in life science C

(井上教授・山本教授・小堤教授・白石准教授・鈴木准教授・増田准教授・竹松准教授)

動物や微生物の細胞における構成成分として重要なタンパク質、糖質、脂質、その合成に関わる酵素などについて概説し、それらの機能が生命現象においてどのような役割を担っているかを論じる。

生命科学特論D Advanced course in life science D

(石川教授・松本教授・中世古准教授)

細胞が増殖する基本原理である細胞周期を染色体機能の立場から概説し、細胞周期制御が個体の発生、老化、発がんなどの高次生命現象にどのように関わるのかを論じる。

生命科学特論E Advanced course in life science E

(竹安教授・眞貝教授・清水教授・吉村准教授・立花准教授)

ゲノム生物学：細胞周期におけるゲノムの動態と遺伝子機能調節機構を分子レベルで解明する。特に、細胞核内におけるゲノムの折りたたみ機構、細胞分裂時における染色体凝縮と分配機構、細胞分化と遺伝子発現調節、等について論じる。

生命科学特論F Advanced course in life science F

(上村教授・佐邊教授・松崎教授・千坂准教授・斎藤准教授)

多細胞社会の構築過程での細胞の様々な振る舞いに注目し、従来の分子細胞生物学的手法に加えて、実験で確かめられた現象をベースにした数理解析的な手法を導入して得られた成果を論ずる。

生命科学特論G Advanced course in life science G

(西田教授・藤田教授・松田教授・小堤教授・米山准教授・中村准教授・竹松准教授)

細胞および個体の外界刺激に対する応答は生命現象の根幹であり、細胞増殖、分化ならびに細胞死の運命決定や発生、脳神経系や免疫系などの高次生命機能の基盤となっている。この応答の分子機構と制御機構について細胞内シグナル伝達を中心に論じる。

生命科学特論H Advanced course in life science H

(渡邊教授・根岸教授・森吉准教授・加藤（裕）准教授)

脳・神経系の認知、感覚、記憶、学習、情動、思考、運動などの高次脳機能の基本原理について分子レベルでのメカニズムについて講述する。また、こうした脳機能の発現の基本ユニットである神経細胞の形態学的、機能的な特徴と、神経細胞より形成される複雑な神経回路の成立過程について講述する。

生命科学特論I Advanced course in life science I

(佐藤教授・荒木教授・米原教授・畠准教授・酒巻准教授・遠藤講師)

多細胞生物を形成する基本単位である一つ一つの細胞が、発生・分化などの課程において、その運命を決定していく現象とその分子機構について、動物から植物、までを題材として統合的に概説し、高次生命現象における細胞死を含めた細胞の運命決定機構を論じる。

生命科学特論J Advanced course in life science J

(湊教授・稻葉教授・杉田教授・服部准教授・高原講師)

腫瘍などの内的な変異や感染など外的な刺激に対する生体の個体としての恒常性維持とその制御機構の基本原理を、免疫応答の視点から遺伝子、分子、細胞、個体レベルで論じる。

生命科学特論K Advanced course in life science K

(垣塚教授・土方准教授・堀講師)

生体は、一つの統一された実態として存在する。このために、脳、神経系、免疫系、内部必系、循環器系等は相互に関連して生体を制御し機能している。生体の統一された機能発現のメカニズムと制御機構について、それらが破綻した病態をとおして講述する。

生命科学特論L Advanced course in life science L

(松崎教授・斎藤准教授)

多細胞体制は単一の受精卵から分裂、誘導、細胞配列の再編成を繰り返し、時間軸の正確な制御のもとに構築・組織化される。この動的で複雑な過程を支配する基本原理を、進化、幹細胞、再生、エピジェネティクス、システム生物学を含む多角的な視野から、様々なモデル生物をとりあげて検証、講述する。

講義科目の説明

【博士後期課程】

先端生命科学 Frontier in Life Sciences

(垣塚教授)

生命科学領域のなかで、特に目覚ましい発展をとげている研究領域の研究について、簡単な背景から最先端の話題にいたるまでを、それぞれの領域の第一人者の先生に講義をしていただく。

生命科学コミュニケーション・生命倫理 Science Communication and Bioethics

(加藤(和)准教授)

高度に発展した生命科学研究に携わる研究者は、知識生産・技術開発を行うだけでなく、自然や社会との調和を考えた広い視野と洞察力をを持つことが重要である。生命科学と社会の関わりを考えるために、非専門家とのコミュニケーションおよび生命倫理、捏造問題などの課題について、実践と講義を通して学ぶ。

生命科学キャリアパス Career Paths in Life Sciences

(河内教授)

民間・行政にある生命科学研究者、経営者、起業家、行政担当者、海外で活躍する日本人PI (principal investigator) や本研究科出身PD (博士研究員) の講義や経験談により、生命科学を学んだ者がその経験を生かすことができる多様な活躍の場の存在を紹介する。受講者には学位取得後の多様で積極的なキャリアパス設計の実現を期待する。

生命科学英語 Academic English Discussion in Life Sciences

(石川教授・Dr.Ian Smith)

The overall objective is to improve your ability to communicate orally in English about scientific data, so that you can participate actively in scientific meetings and discussions conducted in English. As speakers, you should be able to describe and review data clearly, logically, and smoothly. As listeners, you should be able to make comments and ask questions that are pertinent, concise, and timely.

■ 統合生命科学専攻

遺伝機構学特別セミナー Seminars for Gene Mechanism

遺伝子と細胞を結びつけるための主要な概念と研究方法について概説する。遺伝子動態学研究の現状を論じる。

多細胞体構築学特別セミナー Seminars for Cell and Developmental Biology

多細胞体構築学、細胞認識学、細胞シグナル学などのテーマについて、論文などをもとに議論し、関連分野の理解を深める。また、各自の研究データについて報告・討論し、研究内容の向上とプレゼンテーションの向上をはかる。

細胞全能性発現学特別セミナー Seminars for Plant Gene and Totipotency

最新の分子生物学（特にゲノム生物学）分子細胞生物学の現状を論じ、細胞の全能性を分子レベル、細胞レベル、個体レベルで解析する研究を紹介するとともに、問題点を整理し、新たな研究の展開を議論できるよう訓練する。

応用生物機構学特別セミナー Seminars for Applied Molecular Biology

動物あるいは微生物の環境応答機構に関して、最先端の話題を取り上げ解説及び討論を行うとともに、この分野の研究発展の方向性及び将来の応用的局面について討論する。

環境応答制御学特別セミナー Seminars for Molecular Mechanisms of Responses to Environmental Stimuli

生物の示す多様な内的・外的環境への応答とその機構に関する分野において、最先端の話題をとりあげて、専門分野にとらわれない幅広い視点から解説・討論を行う。

形態形成学特別セミナー Seminars for Molecular and Developmental Biology

形態形成の諸問題をテーマにして、論文をもとに議論し理解を深める。同時に、各自の研究データを報告し、討論を通じて研究内容の向上をはかる。

細胞機能動態学特別セミナー Seminars for Mammalian Molecular and Cellular Biology

発生・分化・発癌等に関わる細胞の挙動の制御機構を分子・細胞・個体の各レベルで論議する。

■ 高次生命科学專攻

認知情報学特別セミナー Seminars for Molecular and Systemic Biology

生命体の認知と情報制御の諸問題についてさまざまな視点から議論する。

体制統御学特別セミナー Seminars for Animal Development and Physiology

体制統御の遺伝的制御に関する最新の情報を取り上げ、幅広い視点から解説・討論を行う。高次生命体の構築機構から細胞分化・増殖異常による癌、免疫疾患、遺伝病、成人病などの病態を分子生物学的に把握する研究手法について概説する。

高次応答制御学特別セミナー Seminars for Molecular Mechanisms of Signal Transductions

高次生命体の遺伝情報及び応答機構の異常は、癌や自己免疫疾患、成人病を発症するに至る。種々の因子による細胞の増殖機構、免疫系の自己・非自己の識別機構等の生体の基本的な応答機構、及び癌、免疫疾患、遺伝病、成人病等の生体の異常機構を解説し討論を行う。

高次生体統御学特別セミナー Seminars for Functional Biology

生体の情報伝達制御に関して最新の情報を取り上げ、幅広い視点から解説討論を行う。

生命文化学特別セミナー Seminars for Cultural and Social Aspects of Life Sciences

生命科学と社会のコミュニケーションの実践のための方法論や理論的研究、生命倫理、現代科学史等について論ずる。

高次生体機能学特別セミナー Seminars for Mammalian Regulatory Network

高次生命体における細胞制御、遺伝子応答、ウイルス等による発がん機構、免疫応答等の原理、更にモデル動物を用いた情報処理機構の原理について論ずる。

教育課程及び履修方法

教育方針

生命科学の広い知識と高度な研究能力を有する人材を、世界最高レベルの研究環境と教育スタッフのもとにおいて養成します。講義、セミナー、実習を大切にしつつ、個々の学生の従事する具体的な研究プロジェクトの遂行も重要視します。一方、本人および他研究者の内容を深く理解するために必要不可欠な討論能力を修得させる目的で、活発に議論する経験を多く積めるように指導します。学生が将来において活躍する生命科学の分野が広範にして多彩なことを考慮し、柔軟な思考と開拓者精神をあわせ持てるようにトレーニングします。生命科学の基本的、原理的思考能力をもつように、さらに、大学院生の出身の学部が多様であるので、研究開始時点から個別的な対応を各学生の個性に対応して十分な指導を行います。また、一人一人の学生が将来、各分野で世界的レベルでの指導者となりうるために、できるだけ早い時点での海外での研究体験を持つように指導します。このような教育理念に基づいて、以下のようなカリキュラムを用意しています。すなわち、研究科必須科目に加え、自専攻及び他専攻の枠組みを超えた研究科選択科目を設けました。学生には、生命科学全体に対する理解が深まるように、バランスよく履修することを主指導教員及び副指導教員が指導します。

各専攻に、「特別実験（実習）及び演習第1」を開設し、多様な学部の出身者のために、必要とする基本的知識、技術を第1学年で修得するようにしています。さらに、「特別実験（実習）及び演習第2」を開設し、より高度な知識、先端技術をマスターするように指導します。

修士論文に至る各種研究会、セミナー、論文紹介などの研究活動を行います。また境界領域を研究する専攻において、指導教員の助言によって学生が所属分野外の研究室に滞在し、実習や調査を主とするプロジェクト研究（インターン）に参加し、その報告書を各専攻に提出させ、単位を修得できるように指導します。

博士後期課程の学生に対しても、各専攻で用意した特別セミナーを履修させ、生命科学に特有な幅広い知識を修得できるよう指導します。

修士課程の修了要件

「特別実験（実習）及び演習第1」「特別実験（実習）及び演習第2」（各10単位）必修

研究科共通必修科目：1単位

研究科共通選択科目及び他研究科開設科目：9単位以上、（但し9単位以上を超えた単位は増加単位）

同課程に2年以上在学し、上記30単位以上を修得、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査及び試験に合格すること。

博士後期課程の修了要件

「特別演習」（8単位）必修

研究科共通必修科目：1単位

研究科共通選択科目：1単位以上、（但し1単位以上を超えた単位は増加単位）

同課程に3年以上在学して研究指導を受け、所定の科目につき上記10単位以上を修得し、修士論文の審査及び試験に合格すること。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 『生命科学キャリアディベロップメント』 について

生命科学研究科では、文部科学省が支援する「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業のひとつとして、「生命科学キャリアディベロップメント」を提案していたところ採択され、平成18-19年度にこれを実施することとなりました。このプログラムは、以下に述べるように研究科の大学院教育を改革することを目的としたものです。私たちは、教育の改善は学生の建設的な意見・提案のフィードバックなしには、成し遂げることはできないと考えています。従って、本研究科学生諸君が、本イニシアティブについて理解するとともに、私たちとともに大学院教育の改善に向かって協力してくれるよう希望します。

本イニシアティブによる大学院教育改革の骨子

1) 大学院講義の充実

修士課程カリキュラム講義は、幅広い生命科学の諸分野や周辺領域を体系的に理解することを目的とし、講義内容の見直しを行いました。特に、生命科学を学ぶ者が知つておくべき生命科学と社会との接点、研究成果を社会に還元し共有する方法についての講義を充実させました。博士後期課程では、従来、各研究室における演習がカリキュラムの基本でしたが、それに加えて、カリキュラム講義を整備しました。これらの新カリキュラムは平成

学生募集

19年度入学の学生より適用されます。

2) 実戦的生命科学英語コミュニケーションプログラム
研究成果が客観的な評価を受けるためには、それを英語論文として公表することはもちろんですが、国際学会、セミナー等で発表し、専門家と科学的な討論を深めることが重要です。英語を母国語としない研究者は、この点でハンディキャップがあるわけですが、従来の我が国の大学院教育は、このような学生のコミュニケーションスキルの修得にほとんど注意を払っていないのが現実でした。「生命科学キャリアディベロップメント」では、研究成果を国際的に発信できるコミュニケーション能力の開発に力を入れます。その方策のひとつとして、大学院学生の国際学会発表、共同研究等のための海外研究室派遣を、単なる渡航滞在費支援のみならず、発表スキルのアドバイスなども含めて総合的に支援します。

3) 学生企画による研究討論会

日頃の実験におわれ、学生はともすると研究室にひきこもりがちです。しかし、同じあるいは異なる分野の学内外の学生に知己を得ることは、学生の視野を広めるばかりでなく、学問を開拓する同世代の同志として一生の財産となると期待されます。このようなきっかけとなるべく、学生が主体的に提案した研究討論会の開催を支援します。

4) 複数指導教員による指導体制

従来、研究室配属を受けた学生は、もっぱら当該研究室の教員による指導を受け、他の研究室教員のアドバイスを受ける機会は必ずしも十分にありませんでした。しかし、さまざまなバックグラウンドをもつ複数の教員から視点の異なるアドバイスを得ることは、幅広い知識と経験、判断力をもつ学生を育てることに重要であると考えています。これらのアドバイスには、現在行っている研究はもちろん、その学生の経歴と興味から判断される学修すべきカリキュラム、将来の進路等に関することがらが含まれます。この目的のために、修士課程、博士後期課程の学生について正指導教員1名に加えて2名の副指導教員を担当させ、個々の学生のニーズに応えたきめ細かな指導を行います。学生諸君は、この制度を利用して、日頃触れる機会が少ない学問分野や生命科学者が活躍する場について積極的に学び、経験することを希望します。

アドミッションポリシー

今日、生命科学は、人類の未来を切り開く先端科学として大きく変貌・発展しつつあります。本研究科は、このような世界的な状況に対応して、世界最高水準の研究拠点の形成と次世代の生命科学をリードする人材養成を目的とし、平成11年にわが国最初の独立した大学院生命科学研究科として発足しました。本研究科は、既存の諸分野における先端領域を真に融合しながら、生命の基本原理を構成する「細胞・分子・遺伝子」を共通言語として、多様な生命体とそれらによって形成される環境を統合的に理解し、生命の将来や尊厳に関わる新しい価値観を作り出す独創的研究と教育を展開しています。

本研究科は、ますます高度化・複雑化する生命科学に対する社会からの多様な要請に応えるべく、以下のような人材の養成を目指します。(1) 生命の基本原理を追求・発見し、世界最高水準の新しい生命科学を推進する研究者。(2) 地球環境保全と人類の健康・福祉・幸福を目指し、民間を含む多様な研究機関で社会に貢献する研究者。(3) 多彩な生命現象全般を広く理解し、教育や行政を通じて社会に貢献する教育・研究者。

本研究科は、このような研究科の理念に共鳴し、本研究科で研鑽を積むことを希望する学生を広く求めていきます。特に、生命の尊厳を十分に理解しながら、既存の枠組みにとらわれない総合的・先端的な生命科学を築き上げる開拓者精神に富む学生を歓迎します。

本研究科は、このような意欲的な学生を各方面から受け入れるため、修士課程入学試験として、「一般入試」、「論文入試」(募集人数：若干名)、及び「社会人特別選抜」(募集人数：若干名)を行っています。「論文入試」では、生命科学とは異なる専門領域、例えば、数学、物理、化学、工学などの理系領域だけでなく、文系領域を学んだ学生をも対象としています。生命文化学分野については、「社会人特別選抜」を選択することもできます。「論文入試」と「社会人特別選抜」の入学者は、「一般入試」の入学者と同一のカリキュラムと同一の修了要件による教育が行われます。博士後期課程への編入学試験は、関連研究分野を有する研究科の修士修了者もしくはそれに準ずる者が受験資格となります。編入学試験は、国際的な情報収集能力・論理的思考・発表能力の基礎となる英語の読解力と記述力を判定する試験に加え、研究能力、研究成果を重視した試験をセミナーの形式によって行い

ます。入学試験の時期は、修士課程については8月、博士後期課程の入学試験は、2月とし、入学時期はいずれも4月とします。

修了後の就業分野

本研究科を修了した者は、大学などの公的研究機関、病院附置研究所、企業の研究所などでポストドクトラルフェローや自立した研究者として、研究に引き続き従事することが期待されます。多くは一定年数後には大学の教授、准教授などの研究教育関係職につくことが期待されます。一方で生命科学の先端的知識を必要とする政府や国際機関関係の研究管理職やバイオテクノロジー関連の企業の研究所のリーダーやジャーナリストでの編集者としても活躍の場があるでしょう。一部の学生は2年後に修士号を取得して修了し、研究サポート職などに従事するでしょうが、引き続き研究を行う場合は、博士号を論文博士などの方法で得ることができます。

学生募集人員は以下のとおりです。

専攻	修士課程	博士後期課程
統合生命科学専攻	44名	17名
高次生命科学専攻	44名	16名
合計	88名	33名

詳細は学生募集要項をご覧下さい。

入学試験関係・教務事務に関するお問い合わせ先

■生命科学研究科 学務掛
電話：075-753-9222
FAX：075-753-9229

その他のお問い合わせ先

■生命科学研究科 総務掛
電話：075-753-9221
FAX：075-753-9247

〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町
<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/j/>

京都大学アクセス図

